

修士論文（要旨）  
2020年1月

被災した地域住民がコミュニティを維持・形成する過程  
ーコミュニティ感覚に着目してー

指導 池田 美樹 准教授

心理学研究科  
臨床心理学専攻  
218J4005  
小松 果歩

Master's Thesis(Abstract)  
January 2020

The Process of Community Rebuilding after the Great East Japan Earthquake: A  
Qualitative Study of the Psychological Sense of Community

Kaho Komatsu  
218J4005  
Master's Program in Clinical Psychology  
Graduate School of Psychology  
J. F. Oberlin University  
Thesis Supervisor: Miki Ikeda

## 目次

第1章 問題と目的 .....	1
1.1 はじめに .....	1
1.2 コミュニティの維持と形成 .....	2
1.3 コミュニティ .....	3
1.4 コミュニティ感覚 .....	3
1.4.1 コミュニティ感覚と精神的健康 .....	4
1.5 日本における災害後の臨床心理学的地域援助 .....	5
1.6 IASCの4Ws(「誰(Who)」が「どこ(Where)」で、「いつ(When)」「何(What)」 をしているのか) ツール .....	6
1.7 課題の整理 .....	6
1.8 目的と研究意義 .....	7
第2章 方法 .....	8
2.1 研究対象者 .....	8
2.2 研究対象者の抽出方法 .....	8
2.3 面接調査の方法 .....	8
2.4 分析方法 .....	8
2.5 分析手続き .....	9
2.6 倫理的配慮 .....	9
第3章 結果 .....	10
3.1 研究対象者の概要 .....	10
3.2 生成された概念 .....	10
3.2.1 ストーリーライン .....	10
3.2.2 カテゴリー毎の説明 .....	11
第4章 考察 .....	19
4.1 フェーズ毎の特徴 .....	19
4.1.1 混乱期 .....	19
4.1.2 避難所・仮設住宅期 .....	21
4.1.3 恒久住宅期 .....	26
4.1.4 フェーズに分類されないカテゴリー及び概念 .....	27
4.2 研究対象者の属性による特徴 .....	28
4.3 コミュニティ感覚の変化 .....	30
4.4 支援ニーズの検討 .....	30
4.4.1 フェーズ毎の支援ニーズ .....	30
4.4.2 居住形態の変化 .....	33
4.4.3 『被災体験と向き合う』 .....	33
4.4.4 コミュニティ感覚を抑制させる概念 .....	34
4.5 災害時の臨床心理学的地域援助方略 .....	34
4.5.1 混乱期 .....	34
4.5.2 避難所・仮設住宅期 .....	35

4.5.3 恒久住宅期 .....	35
4.5.4 居住形態の変化 .....	36
4.5.5 コミュニティ感覚 .....	36
4.5.6 コミュニティの担い手の特定 .....	36
4.6 本研究の限界点と今後の展望 .....	37
謝辞 .....	39
【参考文献】 .....	I

## 第1章 問題と目的

東日本大震災のような自然災害が発生すると、人々は衝撃を受け、さまざまな反応を示す。しかしながら、災害を経験した全ての人が PTSD のようなトラウマ関連疾患を発症するわけではなく、被災した人々の多くは、トラウマ体験から回復する能力を有している。ソーシャルサポートはトラウマ関連疾患の防御因子となり、ソーシャルサポートを利用できる人は、そうでない人に比べて、ストレスの影響を受けにくく、健康状態が悪化しにくい (Caplan, 1974; Griepy, Honkaniemi & Quesnel-Vallee, 2016)。

2007年に精神保健・心理社会的支援(Mental Health and Psychosocial Support: MHPSS)に関わる機関間常設委員会(Inter-Agency Standing Committee: IASC)から発刊された「災害・紛争等緊急時における精神保健・心理社会的支援に関する IASC ガイドライン」は、コミュニティを支援することの重要性を強調しており、被災した地域の人的資源を特定し、その資源が持つ力を促進する必要性を示している。しかしながら大規模災害後には、コミュニティの形成と維持に関する問題がしばしば浮上し、2011年3月の東日本大震災でも、それが課題となった(中尾, 2017)。一方、災害後の臨床心理学的地域援助において、コミュニティの維持や再形成、新たなコミュニティの形成を支え、コミュニティの機能を回復させるために有効な臨床心理学的地域援助の手立ては発展途上にある。また、コミュニティ感覚の高さは、精神的健康にポジティブな影響を与えることが先行研究から明らかとなっているが、それを促進させるための方略は立案されていない(笹尾, 2007)。

以上のことから、本研究は、被災後から現在に至るまでの居住形態の変化に着目しながら、IASC のピラミッドにおける第2層「コミュニティおよび家庭の支援」に関わる取り組みに焦点をあてる。

本研究の目的は、以下の2点である。第一に被災後から現在に至るまでの居住形態の変化に伴う地域住民のコミュニティ感覚の変化、すなわちコミュニティとのつながりに関する認知プロセス、及び、つながりを形成・維持するための行動プロセスを明らかにし、時期別の支援ニーズを示すことである。第二に、コミュニティ感覚を形成することはトラウマ関連疾患の予防につながるという観点から、被災地での精神保健・心理社会的支援活動における臨床心理学的地域援助モデルを作成することである。これらは、災害後の臨床心理学的地域援助活動の基礎資料となることが期待される。

## 第2章 方法

本研究で定めた条件を満たし、協力の同意が得られた10名の研究協力者を対象に、1時間程度の半構造化したインタビューを実施した。分析には、木下(2007)による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いた。分析焦点者は、「コミュニティの担い手として地域づくりに参加している地域住民」であり、分析テーマは「被災した地域住民が被災前からあったつながりを維持・形成しつづけるプロセス」とした。

## 第3章 結果

M-GTAによる分析の結果、2つの【コアカテゴリー】、3つの『サブカテゴリー』、12

つの「カテゴリー」、37 つの<概念>が生成された。ストーリーラインは以下の通りである。なお、コアカテゴリーは“【】”，サブカテゴリーは“『』”，カテゴリーは“「」”，概念は“<>”で表し、地方自治体特有のカテゴリーや概念には二重下線を引き、それ以外のボランティアとして地域活動に関わる方々特有のカテゴリーや概念には下線を引く。

被災した地域住民がコミュニティを維持・形成するプロセスは、『被災後の衝撃』からはじまっていた。また地域住民は居住形態の変化を表す「抗えない節目」により、被災後から現在に至るまで【繰り返されるコミュニティの崩壊と形成】を経験していた。

避難所や仮設住宅での生活がはじまると、『こうしてはいられない』という気持ちの芽生えから、『現状からの打開』のために、<はじめの一步の親切>を実行し、その「一步が役割に」なっていった。次第に「習慣化した共同作業」がはじまるが、活動の中では問題に直面することもあり、「問題への対処」を共に実施することになる。この<みんなで問題解決>することを通して、「信頼関係の構築」が行われ、<“支えねば”から“支えられてた”実感へ>とつながった。

また、このコミュニティの維持と形成に関わり続ける背景には、<愛する町を守る>や<終わらない「復興」>に対する思い等の「活動の動機」が存在した。

恒久住宅期になると、『被災体験と向き合う』ようになり、<被災前にあった日常の回想>行うようになった。また突然、<言葉では表現できない不安>に襲われるような瞬間もあるが、そうしたときは、同じ地区に住む隣人や、避難所や仮設住宅での生活の中で出会った友人、被災前からの友人に打ち明けることで、<被災した者同士にしかわからない気持ちの共有>を行っていた。現在は、<今だから話せる体験>が増えてきた一方で、<まだ直面しきれない記憶>もあり、その両方が混在するような状況と言える。

## 第4章 考察

分析の結果、コミュニティを維持・形成する過程は、「混乱期」「避難所・仮設住宅期」「恒久住宅期」の3フェーズに分類できることが明らかになった。また、属性により担う役割の内容や役割を獲得する時期が異なることが示された。さらに、コミュニティ感覚は流動的であり、一度促進されても、その後、抑制される場合があり、流動的であることも示唆された。

また支援ニーズはフェーズ毎に変化していき、混乱期では、IASCのピラミッドの第1層、避難所・仮設住宅期や恒久住宅期では、第2層から第4層へのニーズが高まる可能性が明らかになった。したがって、災害後の臨床心理学的地域援助において、IASCのピラミッドは支援ニーズのターゲットとなると考えられる。

また居住形態が変化するたびに、コミュニティの崩壊と形成を繰り返しており、コミュニティを維持したり、形成したりする過程では、<地域づくりの難しさに直面>することもあった。そうした際、本研究の対象者はつながりを活用しながら困難に対処していたことから、コミュニティの担い手同士を繋ぐことは有用な援助方略と考えられる。

さらに居住形態の変化は、これまであったつながりから遮断されるきっかけとなる可能性が示されたため、自治体や町内会を発足して、住民同士が見守り合う体制を整えることや、気軽に参加可能な茶話会等の実施が有効だと考えられる。

また恒久住宅期へ移行してから、『被災体験と向き合う』ようになった方が複数いるこ

とから、被災者同士が語りあう場の提供が必要である可能性が示された。こうした場の提供は、現在進行形で求められている可能性が高く、さらに、これは従来から実施されていた茶話会等の有用性を裏付けるものとも言える。

さらに本研究より、コミュニティの担い手を特定することの重要性が示されたと言える。コミュニティを維持・形成するためには、担い手となる人的資源が重要な役割を果たしている。IASC（2007）が推奨している通り、地域の人的資源を特定し、彼らを窓口としながら、コミュニティの機能回復を促すことが求められる。

一方で、所属団体により、役割を持つ時期や活動の動機に違いがあることが明らかになった。コミュニティの中の人的資源を特定する際には、住民の状況や属性等を丁寧に把握したうえで、住民同士をつなぎ、関係調整を行うことがコミュニティの維持や形成の助けとなると言える。例えば、自治会や町内会の運営にコミュニティ内、場合によっては、コミュニティ以外の支援者が参与し、連携や協働のために環境・関係の調整を行うことは有用かもしれない。

本研究の課題は以下の通りである。第一に、本研究は、一般化可能な援助モデルの作成が十分に達成されなかった。そのため、分析テーマの再設定や、分析手法を変更することにより、一般化可能な結果図の作成が期待される。

第二に、分析対象者の属性による違いについてである。今後は、研究対象者の属性をさらに統制し、分析を行うことで、より、研究対象者の実際の体験に根差した理論を生成できると考えられる。

第三に、インタビューの内容についてである。今後は、コミュニティの担い手となる方々を支えるという観点から、困難感に着目した調査の実施が望まれる。

【参考文献】

- 安藤 延男・星野 命・笹尾敏明 (2007) . 日本のコミュニティ心理学. 日本コミュニティ心理学会 (編) コミュニティ心理学ハンドブック (pp. 23-34) 東京大学出版会
- Bonanno, G. A. (2004) . Loss, trauma and human resilience: have we understanding the human capacity to thrive after extremely aversive events?. *Am psychol*, 59, 20-28.
- Caplan, G. (1974). *Support system and community mental health*. New York: Behavioral.
- Davidson, W. B. & Cotter, P. R. (1986) . Measurement of sense of community within the sphere of city. *Journal of Applied Social Psychology*, 16, 608-619.
- Duffy, K. G. & Wong, F. Y. (1996) . *Community Psychology*. Allyn & Bacon. (植村 勝彦 (監訳) (1999) コミュニティ心理学 -社会問題への理解と援助 ナカニシヤ出版)
- 藤澤 美穂・山口 浩 (2012) . 東日本大震災のアウトリーチ支援におけるリラクゼーションの実践 現代行動科学会誌, 28, 18-29
- 外務省 (2015) . 緊急・人道支援 国際機関を通じた援助用語説明 人道支援 [https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jindo/jindoushien2\\_2y.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jindo/jindoushien2_2y.html) (2019年12月29日)
- Garipey G, Honkaniemi H & Quesnel-Vallee A (2016) . Social support and protection from depression: systematic review of current findings in Western countries. *The British Journal of Psychiatry: the Journal of mental science* 209, 284-293.
- Glynn, T. J. (1981) . Psychological sense of community: Measurement and applications. *Human Relations*, 34, 789-818.
- Harvey, M.R. (1996) An ecological view of psychological trauma and trauma recovery. *Journal of Traumatic Stress*, 9 (1) , 3-28.
- 林 春男 (2003) . いのちを守る地震防災学 岩波書店
- Heller, K., Price, R. H., Reinharatz, S., Riger, S. & Wandersman, A. (1984) *Psychology and community change*. Homewood, IL: Dorsey.
- Heller, K. (1984) . Historical trends in mental health beliefs and practices. In K. Heller, R. Price, S. Reinharz, S. Riger, & A. Wandersman, *Psychology and community change* (2nd ed.) Dorsey. pp.26-48.
- ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 (2014) . 生活復興のための 15 章～「東日本大震災生活復興プロジェクト」報告～ 復興庁 平成 25 年度委託事業 Retrieved from [http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-5/20140320\\_jugosh o.pdf](http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-5/20140320_jugosh o.pdf) (2019年4月25日)
- Inter-Agency Standing Committee (IASC) (2007) . 災害・紛争等緊急時における精神保健・心理社会的支援に関する IASC ガイドライン ジュネーブ: IASC

- IASC MHPSS レファレンス・グループ (2012) . 災害・紛争等緊急時における精神保健・心理社会的支援の連携・調整のための活動コード・マニュアル～誰が、いつ、どこで、何をしているのか～ (フィールド・テスト版) . ジュネーブ
- 岩壁 茂 (2017) . 緊急支援とアウトリーチでの失敗を防ぐ 小澤 康司・中垣 真通・小俣 和義 (編) 緊急支援のアウトリーチ -現場で求められる心理的支援の理論と実践- (pp.240-242) 遠見書房
- 菊池 陽子 (2017) . 中長期的な被災地での支援 小澤 康司・中垣 真通・小俣 和義 (編) 緊急支援のアウトリーチ -現場で求められる心理的支援の理論と実践- (pp. 97-99) 遠見書房
- 木下 康仁 (2007) . ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- 小松 果歩・赤坂 美幸・森光 玲雄・西田 有希・池田 美樹 (2018) 熊本地震における精神保健・心理社会的支援の文献レビュー ～ IASC の 4Ws ツールを用いた分類～ 桜美林大学心理学研究, 9, 17-33
- Lemire, C.M. (2011) Grief and Resilience. In Stoddard, F.J. Jr., Pandya, A. & Katz, C.L. (Ed.), *Disaster Psychiatry: Readiness, Evaluation and Treatment*. (pp. -) . Arlington, Virginia and London, American Psychiatric Publishing. (スタッダード, F. J., パンディヤ, A. & カッツ, C. L. 富田 博秋・高橋 祥友・丹羽 真一 (監訳) (2015) . 災害精神医学 星和書店)
- 松井 豊 (2017) . 東日本大震災における心理学者の支援活動と研究の概観 心理学評論, 60 (4), 277-284
- Maclver, R. M. (1970) . *Community: a sociological study: being an attempt to set out the nature and fundamental laws of social life*. London: Macmillan and co., limited.
- McMillan, D. W., & Chavis, D.M (1986) . Sense of community: A definition and theory. *American Journal of Community Psychology*, 14 (1) , 6-23.
- 松本 和紀 (2014) . 東日本大震災直後期・急性期の宮城県の精神医療の概観 松本 和紀・松岡 洋夫 (編) 東日本大震災の精神医療における被災とその対応—宮城県の直後期から急性期を振り返る— (pp.17-21) 厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究
- 箕口 雅博 (2011) . 臨床心理地域援助特論 放送大学教育振興会
- 中島 聡美 (2017) . 第1章 災害におけるレジリエンス. 奥村 茉莉子 (編) ところに寄り添う災害支援 (pp. 243-255) 金剛出版
- 中尾 公一 (2017) . 震災復興過程の組織間関係の形成と維持 ——公共・非営利領域を対象に—— 東北大学大学院経済学研究科 博士論文
- O' Connell, R., Poudyal, B., Streel E., Bahgat, F., Tol, Wietse, T., & Peter, V. (2012) . Who is Where, When, doing What: mapping services for mental health and psychosocial support in emergencies. *Intervention*, 10(2), 171-176.
- 小俣 和義 (2017) . 第3章支援の形としてのカフェ活動の意味と課題 一般社団法人日本臨床心理士会 (監修) ところに寄り添う災害支援 (pp.96-122) 金剛出版

版

- 小澤 康司 (2017) . 第 1 章 緊急支援のアウトリーチは何か 小澤 康司・中垣 真通・小俣 和義 (編) 緊急支援のアウトリーチ -現場で求められる心理的支援の理論と実践- (pp.11-24) 遠見書房
- Pretty, G. M. H. (1990) . Relating Psychological Sense of Community to Social Climate Characteristics. *Journal of Community Psychology*, 18, 60-65.
- Pretty, G. M. H., Andrew, L. & Collet, C. (1994) . Exploring Adolescents Sense of Community and its Relationship to Loneliness. *Journal of Community Psychology*, 22, 346-379.
- Prezza, M., Amici, M. Roberti, T. & Tedeschi, G. (2001) . Sense of Community Referred to the Whole Town: Its relations with neighboring, loneliness, life satisfaction, and area of residence. *Journal of Community Psychology*, 29, 29-52.
- Puddifoot, J. (1996) . Some Initial Considerations in the Measurement of Community Identity. *Journal of Community Psychology*, 24, 327-337.
- Royal, M. A. & Rossi, R. J. (1996) . Individual-level Correlates of Sense of Community: Findings from workplace and school. *Journal of Community Psychology*, 24, 395-416.
- 櫻井 常矢・伊藤 亜都子 (2013) . 震災復興をめぐるコミュニティ形成とその課題 地域政策研究, 15 (3), 41-65
- Sarason, S.B. (1974) . *The psychological sense of community: Prospects for a community psychology*. Jossey-Bass.
- 笹尾 敏明 (2007) . コミュニティ感覚 日本コミュニティ心理学会 (編) コミュニティ心理学ハンドブック (pp.115-129) 東京大学出版会
- 佐藤 茂樹 (2014) . 石巻赤十字病院への精神科リエゾン診療支援 松本 和紀・松岡 洋夫 (編) 東日本大震災の精神医療における被災とその対応—宮城県の直後期から急性期を振り返る— (pp. 31-37) 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究
- 総務省消防庁 (2011) . 平成 23 年版 消防白書. 総務省消防庁 <https://www.fdma.go.jp/publication/hakusho/h23/> (2019 年 12 月 29 日)
- 杉村 省吾 (2001) . 第 3 章 阪神淡路大震災被災者への心のケア 山本 和郎 (編) 臨床心理学的地域援助の展開——コミュニティ心理学の実践と今日的課題—— (pp. 36-53) 培風館
- 高橋 美保・森田 慎一郎・石津 和子 (2010) . 集団主義とコミュニティ感覚がメンタルヘルスに及ぼす影響 ——日・中・韓の国際比較を通して—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 50, 159-179
- 高畠 克子 (2011) . 臨床心理学をまなぶ (5) コミュニティ・アプローチ 東京大学出版会
- 田中 英三郎・亀岡 智美・加藤 寛 (2015) . 平成 26 年度【長期研究 1】阪神・淡路大震災が被災者のこころの健康にもたらした長期的な影響に関する研究. <http://>

- [www.j-hits.org/function/research/pdf/26\\_1chouki.pdf](http://www.j-hits.org/function/research/pdf/26_1chouki.pdf) (2019年12月29日)
- 東京福祉保健局 (2018). 災害時医療救護ガイドライン (第2版) 東京福祉保健局  
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryoku/kyuukyuu/saigai/guideline.html>  
ml (2019年12月29日)
- 植村 勝彦 (2012). 現代コミュニティ心理学—理論と展開— 東京大学出版会
- 渡 路子 (2017). DPATの現状および課題について 平成29年度厚生労働科学研究  
費補助金 (障害者政策総合研究事業) 「災害派遣精神医療チーム(DPAT)の機能  
強化に関する研究」 <https://www.mhlw.go.jp/content/10802000/000328602.pdf>  
pdf (2020年1月8日)
- World Health Organization, War Trauma Foundation and World Vision  
International (2011). Psychological first aid: Guide for field workers. WHO:  
Geneva. (国立精神・神経医療研究センター, ケア・宮城, 公益財団法人プラン・  
ジャパン (訳) (2012). 心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド: PFA)  
フィールド・ガイド)
- 山口 桂子・服部 淳子・中村 菜穂・山本 貴子・小林 督子 (2002). 看護師の職場コ  
ミュニティ感覚とストレス反応: 看護師用コミュニティ感覚尺度の作成を中心に  
愛知県立看護大学紀要, 8, 17-24
- 山本 和郎 (編) (2001). 臨床心理学的地域援助の展開——コミュニティ心理学の実  
践と今日的課題—— 培風館
- 山本 和郎 (2007). 臨床心理学的地域援助領域 日本コミュニティ心理学会 (編) コ  
ミュニティ心理学ハンドブック (pp. 443-453) 東京大学出版社
- 全国保健師長会 (2012). 大規模災害における保健師の活動マニュアル [http://www.jpha.or.jp/sub/pdf/menu04\\_2\\_h25\\_01.pdf](http://www.jpha.or.jp/sub/pdf/menu04_2_h25_01.pdf)  
pdf (2019年12月29日)